

【登場人物表】

ア	鯉登	（18）	生徒会長
パ	弘仲	よし乃（68）	生徒会書記
ー	芋飼	小巻（76）	シニアクラス
住	永倉	辰吉（覆面男）	（79）シニアクラス
民	小田	島 慧（18）	生徒会副会長
	小林	出雲（18）	茶道部部长
	三鷹	宏（67）	芸能事務所社長
	剣	佑磨（22）	駆け出しのアイドル
	安城	宰介（58）	聖エベレッタ学園理事長
	芋飼	通（41）	小巻の息子
	芋飼	友梨奈（29）	通の妻
	芋飼	丹十郎（享年70）	小巻の夫・幻影
	ミキ	（17）	現役クラス
	初栄	（71）	シニアクラス
	朝霧	静（32）	養護教諭
	天子	（58）	宗教団体代表
	男性	司会者（50）	
	男性	清掃員（47）	よし乃のバイトの先輩
	女子	議長（18）	
	女子	生徒1（16）	
	女子	生徒2（16）	
	女子	生徒3（18）	
	女子	生徒4（16）	
	女子	生徒5（16）	
	男子	生徒会役員（18）	
	男子	生徒1（17）	
	男子	生徒2（17）	
	男子	生徒3（18）	
	女生徒	A（73）	
	女生徒	B（70）	
	女生徒	C（68）	
	女生徒	D（82）	
	男子	生徒A（80）	
	男子	生徒B（69）	
	男子	生徒C（77）	
	男子	生徒D（71）	
	男子	生徒E（66）	
購買部店主（59）	化学教師（48）		
パート住民	消防士		

○聖エベレッタ学園・校門（朝）

一台の高級外車が停まる。

中からつば広帽を被った芋飼小卷（76）がマルチーズを抱えて降り立つ。

小卷「ドラクロワちゃん、今日も暑いわね」

マルチーズ、ワンと鳴く。

通「母さん、今日も学園生活を楽しんで来て下さい」

助手席の扉が閉まると、車は走り去っていく。

『犬のフンお断り！』と貼り紙がされている門柱の前で、体を震わせ屈みこむマルチーズ。

小卷「さあ、行きましょうか」

と、マルチーズのリードを引きながら校内へと入っていく。

○同・女子個室トイレ

鯉登みらい（18）、スマホ画面の掲示板（裏サイト）をチェック。

『今の生徒会長は良くやってるよ』『これからも頑張ってるよ』『という書きこみに口元が緩むみらい。』

『シニアクラスの連中ホント何とかしてほしい』『学園に蔓延る老害を排除しろ』『学校はどっかの国と同じでシニアに甘い』という書き込みに、眉間に皺が寄るみらい。

女子生徒1の声「きゃああ！」
と、扉の外から叫び声が聞こえてくる。

○同・洗面所

みらい、個室トイレから飛び出すと、洗面所の前で体を寄せ合い、女子生徒1（16）と2（16）が震えている。

みらい「なに？」
女子生徒1「あ、あれ」

と、洗面台に置かれた総入れ歯を指さす。
女子生徒1「マジ、気持ち悪い！」
女子生徒2「前にも入れ歯が置きっぱなしになつてたんですよ。シニアクラスの人たち何とかしてください！」
みらい「わかった」
と、ため息を漏らす。

○同・3年S組教室

『夜間頻尿』『带状疱疹』『軟骨成分』
などの習字がずらりと並ぶ。
『火の消し忘れと薬の飲み忘れは即命取り』という標語が貼つてある。
学ランとブレザー姿の高齢者で賑わう教室。

女生徒A（73）とB（70）、花が置かれた机に目をやり、

女生徒A「あんなに元気だったのにね」

女生徒B「突然だもんね。怖い、怖い。私も気がつけな」と

永倉辰吉（79）、花が置かれた机に目をやり、ラベルに『長命水』と書かれたペットボトルの水を喉を鳴らし飲み干す。
扉が開き、

みらいの声「失礼します」
と、みらいが入ってくる。

弘伸よし乃（68）、みらいに歩み寄り、
よし乃「あら、会長さん」

みらい「よし乃さん」

よし乃「今日はどうしたの？」

みらい「ジップロックに入った入れ歯を

よし乃に見せ、

みらい「これを届けに。もしかしてよし乃さ

んのじゃないわよね？」

よし乃「も、勿論。私はまだ自前で足りてま

すから」

みらい「そう」

みらい「教室を見渡し、

みらい「皆さん、ちよつといいですか？ 今

朝女子トイレに……」

教卓の前の女生徒（８８）、口元をもごもごさせながら入れ歯を凝視する
 みらい「もしかして？」
 女生徒、口から入れ歯を取り出し、ブラッシングし出す。
 みらい「げえっ！」
 と、顔を顰める。
 マルチーズがみらいの左足に掴まり立ちし、激しく腰を振り出す。
 みらい「な、何っ！！」
 と、後ろに飛びのく。
 小巻、マルチーズを抱き上げ、
 小巻「ドラクロワちゃん、ダメでしょ。はしたない子ね」
 と、マルチーズを抱きかかえ席に戻りかける。
 みらい「芋飼さん、またイヌを持ち込んで。何度言ったら」
 小巻「ドラクロワちゃん！」
 みらい「えっ？」
 小巻「イヌなんて呼ばないで！それに理事長にはちゃんと許可を貰ってます」
 と、席につきそっぽを向く。
 みらい「理事長はシニアクラスにホント甘いんだから。だから皆つけ上がるのよ」
 マルチーズと戯れる小巻を筆頭に転寝するもの、粉薬を拭き零し仲間に背中をさすってもらうものなど皆自由な振る舞いを見せる。
 よし乃「ごめんなさいね。年を取ると皆自由奔放なのか」
 永倉「永倉、長命水を飲み干し、
 永倉「うえっ、もう腹タプタプ」
 と、腹つつみを打つ。
 みらい「もういい！」
 と、扉を強く閉め出て行く。
 よし乃「あ、会長さん……」
 扉が閉まる音に驚き、再び粉薬を拭き零す男子生徒。

○同・中庭
ギヤル風のミキ（１７）、ベンチに腰掛け、初栄（７１）の顔にギヤルメイクを施す。

ミキ「カンペキ！ ほら」

と、初栄に手鏡を手渡す。

ミキ「手鏡に映る派手なメイクの初栄の顔。」

初栄「めっちゃ可愛いよ、ハッツアー」

と、初栄「そ、そうかい」

と、照れくさそうに鏡に映る自分の顔を

何度も確かめる。

ミキ「そうだ、ハッツアー。写メ撮ろ」

ミキ、初栄とギヤルピースし、スマホのシャッターを押す。

○同・茶道部・茶室

茶釜から湯気が立ち昇る。

着物姿の小林出雲（１８）、茶をたてる

と、みらいに茶碗を差し出す。

みらい「茶を飲み干し、人差し指と親指

で口元を拭い取り、指先を懐紙で拭く。」

みらい「結構なお点前で」

出雲「軽く頭を下げる。」

みらい「こうやってる時間が唯一心の落ちつく時間」

出雲「なに、どうした？」

みらい「生徒会長になってから日々厄介ごと

が飛び込んでくるし、穏やかに過ごせたこ

となんて」

小田島 慧（１８）、茶室に駆けこんで

来て、

小田島「会長、やっぱりここでしたか。大変

です。またシニアクラスの生徒が」

みらい「ほらね」

と、小田島と共に渋々茶室を出て行く。

出雲「頑張れー」

と、手を振る。

○同・中庭

みらいと小田島、回し姿の男子生徒A

みらい「（80）と対峙し、
 傍らで体を寄せ合い男子生徒Aに怯えた
 表情を向ける女子生徒1と2。皆迷
 小田島「ここは素直に服着ましようよ。皆迷
 惑してるわけだし」
 男子生徒A「迷惑？ わしがいつ人に迷惑か
 けた？ 足腰の為に四股を踏んで何が悪い
 ！」
 みらい「お年頃の女子の前で禪一丁はどう見
 ても問題でしょうが」
 男子生徒A「禪？！ これは回しだ。四股を
 踏むときは回しに限る」
 と、回しを叩く。
 みらい「どっちだっていいわ。迷惑なのは一
 緒よ。ったく、わかんないかな」
 男子生徒A「何を？！ 小娘が！」
 と、みらいの肩を小突く。
 みらい「いたっ」
 と、右肩を押さえる。
 みらい「皆見たわね。私が今暴力受けたの」
 小田島「はい、確かに」
 みらい「口で言っても分かってもらえないな
 ら仕方ないわ。あれを」
 小田島「は、はい」
 と、駆け去っていく。
 男子生徒A「（不安そうに）あれ？」
 小田島「サスマタを手に戻って来て、み
 らいに手渡す。」
 みらい「覚悟しなさい」
 と、男子生徒Aに詰め寄る。
 × × ×
 ミキ「ハッツー、知ってる？ この学園出る
 らしいよ」
 初栄「出るって何が？」
 ミキ「座敷わらし。5歳くらいの小さな女の
 子なんだって」
 と、男子生徒Aにサスマタで応戦するみ
 らいに目をやる。

ミキ「それにしても何で皆、私たちみたいに仲良くできないんだろぅね、ハッツ―」
初栄「そうだね」
ミキ「皆私たちみたいならこの学園もハッピーなのね」
と、逃げ惑う男子生徒Aをサスマタで追いかけるみらいに再び目をやる。

○同・理事長室（タ）

みらいと安城宰介（58）、机を挟み向かい合う。

安城「君の憤りも分かるがね、ここは学園の存続のためにもグツと堪えてくれんか」

みらい「理事長がそんなだからあの人たちは付けあがるんです！」

安城「弱ったな」と、頭を掻く。

みらい「現に今だってシニアクラスの生徒に

対し不満を抱く現役世代は大勢います」
安城「椅子から立ち上がり、窓際に移動すると外を覗き込む。

安城「全盛期には一学年七クラスあった我が校も、今じゃ少子高齢化で三クラスと年々生徒数は減る一方だ。君も知ってるだろ？」
みらい「それは重々」

安城「ウチだけに限った話じゃない。どこの学校も生徒を確保するのに必死だ。そこで

白羽の矢が立ったのが時間とお金に余裕がある高齢者というわけだ」

安城「みらいに向き直り、

安城「人生100年代。今の高齢者は気持ちも若いし、それに学ぶ意欲に溢れている。そんな高齢者を取り込まない手はないと思

わんか？」

みらい「しかし、彼らは自由過ぎます。このままでは学園の風紀そのものが危ぶまれま

す」

安城「ウチの校風は『自由』だよ、君。それ

にこれから多様性の時代だ。高齢者と如何に上手に共存するかもその一つだよ」
みらい「多様性ですか……」
安城「現役世代と彼らとで軋轢が生じているならそれを解決するのが君の役目だろ、それとも君には少し荷が重いかな？」
みらい「そんなこと！」
安城「なら頼むよ。期待してるぞ、会長さん」
と、みらいの肩に手を置く。

○同・校庭（夕）

みらい「通学鞆を肩にかけ、足早に校門に向かって歩いていく。」
みらい「多様性、多様性って皆言い過ぎよ。きれいな事言って結局はお金が目当てじゃない、あの守銭奴！」
と、校庭に落ちている黒いかりんとう状のものを踏む。
みらい「うっ！ この感触は」
と、恐る恐るローファアの裏を見ると糞がこびりついてる。
みらい「ん、もう！」
と、地団駄を踏む。

○聖エベレッタ学園・校門（朝）

乗用車が止まり、小巻を下ろすと走り去っていく。
小巻「抱きかかえたマルチーズを地面に下ろす。」
みらい「の声」芋飼さん、おはよー」
と、満面の笑みで校門の前に立つみらい。
小巻「マルチーズを抱き上げる。」
みらい「今日はちゃんとトイレ済ませてきたあ？ ドラクロワちゃん」
と、マルチーズの顎を撫でる。
小巻「行きましょ、ドラクロワちゃん」
と、足早に校門を通り過ぎる。
みらい「小巻の後に歩いて行く。」
小巻「付いてこないで頂戴」

みらい「別に付いて行ってもいい。私もこっちに用があるだけ」
 小巻「あら、そう。変な子」
 と、歩く速さを早める。
 みらいも歩を早め、小巻について行く。
 ○同・生徒会室（タ）
 教室には数人の生徒。
 みらい「今日の議題は以前から問題に上がっているシニアクラスの奔放な振る舞いについてです。被害報告を小田島副会長、お願い」
 小田島「小田島、立ち上がり、みらいに目配せし、小田島「それでは僕から被害状況を」
 小田島「公共の場での入れ歯の放置は当たり前、前、中には精力剤が放置されてたなんてケースも」
 女子議長「議長（18）、顔を顰め、女子議長「げえっ、最悪っ！」
 男子生徒会役員「お年寄りやるじゃん」
 小田島「（咳払いし）続けますね。さら『今だけ男』と称して年配女性数名による男子トイレの不正利用や胡散臭い水を高額で売りつけられそうになったなどの被害が報告されています」
 と、みらいに目配せし、席につく。
 みらい「あ、ありがとうございます」
 みらい「よし乃、鉛筆を持ちながら転寝する。」
 みらい「よし乃さん！ちゃんと記録録ってるの？！」
 よし乃「（驚いて目を開け）あ、はい！」
 みらい「あなた、書記でしょ？　しっかりしてよね」
 よし乃「す、すみません。午後の体育終わりましたものです」
 みらい「あなた、クラスよ。分かっている？　戻ったらあなたからもちやんと注意して、いい？！」

よし乃「分かりました」

みらい「とにかく、学園の秩序と平穩を守る
ことが我々生徒会の役目です。皆で一丸と
なつて守り抜く、いいわね」

『はい！』と一斉に返事が起こる。

× × ×

室内に夕日が射し込む中、『真のリーダ
ー像は歴史に学べ』という本を読むみら

い。
みらい、本を閉じると、立ち上がり、壁
に飾られた歴代生徒会長の宣材写真を見
上げる。

みらい「偉大な諸先輩方が築き上げてこれ
た学園の規律を私の代で台無しには出来な
い。必ず守ってみせる」
と、部屋を出て行く。

○聖エベレッタ学園・渡り廊下（タ）

みらい、人気のない渡り廊下を歩く。

後ろから走って来たおかつぱ頭の女兒
（５）、「みらいにぶつかる。」

みらい「いたっ！」

女兒、立ち止まり、みらいを仏頂面で見
つめる。

みらい「何よ？ 変な子ね」

女兒、走り去っていく。

みらい「あ、こら。あやまんなさい！」

走り去る女兒の後姿を見ながら、

みらい「ったく。でも、何であんな小さな子
が」

と、首を傾げる。

○芋飼宅・外観（夜）
洋館風の豪邸。

○同・小巻の部屋（夜）

小巻、マルチーズを膝に乗せ、揺り椅子
に揺られる。

壁の向こうから、
友梨奈の声「お義母さん、また私を『夏美さ

ん』て言うのよ。当てつけにも程があるわ。それは亡くなつた前妻の夏美さんに比べたら私は至らない嫁かもよ。だからって」と、泣き出す声が漏れ聞こえてくる。こっちは一日仕事で疲れてんだ」

友梨奈の声「何よ！ 私がこのウチでどんな辛い目にあつてるか、あなたは知らないのよ。結局あなたは仕事、仕事で私のことなんてどうだっていいのね」

通の声「おい、何してるんだ」

友梨奈の声「出て行くわ」

通の声「待て待て！ 俺が悪かったよ」

小巻の口元が緩む。

○同・通夫婦の寝室（夜）

通「母さんのことはそのウチ何とかするよ。母さんだつていつまで元気でいられるか。そうなつたら施設にでも入れて、後は夫婦水入らず」

友梨奈「本当？」

通「ああ。だからもう少しだけ辛抱してくれ、お願いだ」

友梨奈「わかつた」

友梨奈「友梨奈、壁に向かって大声で、友梨奈「早く施設に入ってくれる日が来ないかしら。今からホント待ち遠しい！」

○同・小巻の部屋（夜）

通の壁の向こうから、

友梨奈の声「困つたヤツだな。聞こえるだろ」

小巻「小巻、世界各地の名所で芋飼丹十郎（享年70）と写真立てに目をやり、小巻「私の味方はもうあなただけ、ドラクワちゃん」

と、マルチーズに頼ずりをする。

○ 聖エベレッタ学園・外観
チャイムが鳴る。

○ 同・廊下

みらい、廊下を速足で駆けていく。

小田島「どうしたんです？ 昼のチャイムと

同時に教室を飛び出して」

みらい「ジャンボ焼きそばパン」

小田島「えっ？ 何です、それ？」

みらい「私は急いでるの！ あなたを相手に
してる時間なんてないの！
と、速度を速める。」

○ 同・購買部

通路に出来たシニアクラスの生徒の長蛇
の列。

みらい「出遅れたか」

と、悔しそうに唇を噛む。

小田島「それに追いつき、

生徒ばかりです」

みらい「今日は十五日よ、それも偶数月の

ね」

小田島「？」

みらい「年金支給日よ」

小田島「ああ」

と、合点がいったように手のひらを打つ。

列の最後尾に並ぶみらいと小田島。

小田島「買えるといいですね」

徐々に列が減り、みらいの番になる。

購買部店主（59）、売店の小窓から顔

を出し、

購買部店主「悪いね。今日は売り切れにつき

営業終了だ。また明日ね」

と、カーテンを閉める。

みらい「あ……」

と、立ち尽くす。

○同・中庭

駆け足で歩くみらいを追う小田島。

向こうから、男子生徒1（17）と2

男子生徒1「買えなかったな、ジャンボ焼き

そばパン」

男子生徒2「仕方ないよ。シニアの方が俺た

ちより金持ってるし」

男子生徒1「シニアクラス、マジ不要」

みらい、立ち止まり男子生徒1と2を見
送る。

小田島「（みらいに追いつき）どうしまし

た？」

みらい「別に」

と、再び駆け足で歩き出す。

× × ×

ベンチに座り、ジャンボ焼きそばパンを
頬張るミキと初栄。

ミキ「ハッツ、美味しいね。でも、奢って

もらってホントいいの」

初栄「いいの、いいの。今日は年金を頂いた

からね。それに大事な友達にこうやって喜

んで貰えて私も嬉しいのよ」

ミキ「ハッツ……」

と、鼻をすすると、初栄に抱きつく。

○ファミレス（夜）

テーブルに教科書とノートを広げ、珈琲

片手に一人座るみらい。

みらい、ノートに数式を書いていくが、

手が止まり、

みらい「なんかやる気でないな」

と、シャープペンを投げ出し、頬杖

をつく。

よし乃と剣 佑磨（22）、店に入っ

て来る。

みらい「嘘っ！」

と、咄嗟にノートで顔を隠す。

よし乃と佑磨、ノートで顔を隠すみらい
の傍を通り過ぎ、離れた一番奥の席に向

かい合って座る。
みらい、ホツとした様子で顔からノートを下ろし、
みらい「あの二人……お孫さん？」
と、楽しそうに佑磨と話すよし乃を訝し気に見詰める。

○路上（夜）

佑磨、よし乃を抱きしめる。
みらい、離れた物陰からよし乃と佑磨を窺う。

佑磨「よし乃から離れ、

佑磨「それじゃあ」
佑磨、立ち去りかけるがよし乃を振り返り、

佑磨「よし乃さん、さっきの話」

よし乃「分かってる。心配しないで」

佑磨「本当？！ ありがとう！」

手を振りながら去っていく佑磨に軽く手を振り返すよし乃。

みらい「よし乃さんの顔、あれは女の顔だわ。

あの二人、おばあちゃんと孫とかそんな微笑ましい関係じゃない」

みらい「首を左右に振り、

みらい「だからって私が詮索すること？ 二人ともいい大人よ。歳は離れてるけどこの

人は自由恋愛の国なんだし、お互い好きな

国は自由恋愛の国なんだし、お互い好きな

ら」
みらい「頷き、

みらい「帰って勉強しよ」

と、その場を離れていく。

○雑居ビル・一室

白装束姿の天子（58）、壇上の机に置かれたペットボトルの水に両手を翳し、目を閉じながら念仏を唱える。
固唾を呑んで天子の様子を窺う多くの高年齢者とマイク片手の男性司会者（50）。
永倉の姿もある。

天子「でえいっ！」

と、大きく目を見開く。

男性司会者「入った？」

男性司会者「目を閉じ、大きく頷く。」

男性司会者「は、入りました！」

『おー』と驚嘆の声が一斉に上がる。

男性司会者「ただの水道水が天子様の念によ

り、飲めば長生き間違いなしの長命水へ様

変わりですよ、皆さん！」

天子「年寄りどもももっとと長生きしたい

かー？！」

高齡者たちにマイクを向ける。

一斉に『おー！』という掛け声が上がる。

男性司会者「天子様の念入りホヤホヤの長命

水。効果は通常とは比べ物にならないこの

代物を本日は特別価格の一本一万円で提供

だ。さあ、欲しい人は並んで」

一斉に壇上に殺到する高齡者たち。

永倉「買う、買うぞ！」

と、もみくちゃにあいながら一万円札を

掲げる。

ラブホテル『M U T H U』・外観（夜）

妖艶な光を放つネオン看板。

○同・廊下（夜）

男性清掃員（47）の後ろを掃除用具が

乗ったカートを押しながらついて行くよ

し乃。

前方から共に学生服姿の男性（77）と

女性（69）が体を寄せ合いながら歩い

てくる。

よし乃、咄嗟にカートの陰に身を潜める。

男性清掃員、すれ違った老齡のカップル

を振り返り、

男性清掃員「元気だねえ。それもコスプレと

は」

よし乃「いえ、あれはちゃんとした制服で

す」

男性清掃員「えっ、なんか言った？」

よし乃「あ、いや」
よし乃「個室に入っていく老齡カップルを見て、
と、あの二人デキてたのね」

男性清掃員「弘仲さん、さっさと片づけちゃ
いまして」

よし乃「は、はい」
よし乃「部屋の鍵を開け、中に入っていく。」

よし乃「清掃用具の入ったバケツを手に
男性清掃員に続く。」

○よし乃のアパート（深夜）

よし乃「真つ暗な部屋に帰宅し、明かり
を点ける。」
部屋は足の踏み場もないほどゴミで溢れ
かえっている。

一角が佑磨のポスターやアクリルスタン
ドなどのグッズで埋め尽くされている。
よし乃「ゴミの山を踏み分け、上着を掛
け終えろと、

よし乃「ただいま、佑磨君」

と、ポスターの佑磨の顔に手を添える。

× × ×

時計の針は午前二時過ぎを指している。
よし乃「唯一スペースのあるベッドの上
で、スマホを操作している。」

画面には『最近、アロマキャンドルにハ
マってます』というタイトルとともにア
ロマキャンドル片手に映る佑磨のSNS

が表示されている。

よし乃「レジ袋からコンビニ弁当を取り
出し食べ始める。」

○聖エベレッタ学園・生徒会室

みらいと小田島、険しい表情で碁盤を睨
む。

小田島「気持ちのよい音を響かせ白石を
置くと、

小田島「よしっ、また四三」
みらい「えっ」

小田島「でも、会長ホント弱いな。五目並べの場合、黒が圧倒的に有利なのに10連敗なんて」

みらい「面白くない」

小田島「え」

みらい「面白くないって言ったの！」

小田島「と、碁盤に並んだ碁石を掻き散らかす。」

小田島「あ、何するんですか！」

みらい「みらい、開いている窓に移動し、の匂い」

小田島「小田島、散らばった碁石を碁笥に戻すと、窓際に移動し、鼻をクンクンさせる。」

小田島「ソースの焦げる匂いだ。たこ焼きかお好み焼き、はたまた焼きそばってところ

ですかね」

みらい「と小田島、怪訝な表情で顔を見合

○同・中庭

みらい「と小田島、たこ焼きを食べながら歩いてくる女子生徒二人組とすれ違う。」

『たこ焼き』と書かれた看板がかかる屋

台が校庭の隅に設置されている。

たこ焼きを慣れた手つきで返していくね

じり鉢巻き姿の永倉。

永倉「永倉、近づいてきたみらいと小田島に、

みらい「おっ、会長さん！一つどうですか？」

永倉「何をって商売をね」

みらい「怪しい水の次はたこ焼き？」

永倉「怪しい水って随分人聞きの悪い。俺は

ただ良いものを皆にも思っただけなの？」

みらい「8個で500円。真面だろ？」

みらい「ええ。でも、学園内の商売は認め

られてませんけど。それに食中毒でも出し

たらどうする気？」

永倉「だから火を通したたこ焼きにしたのよ。」

これが冷やしキュウリだったら分かんないよ。その辺は俺だって考えてんだから」
小田島「永倉の手際の良さに」それにしても見事な手際ですね」
永倉「何、昔ちよつとやってたもんだから。これぐらい御手のもんよ」
小田島「生唾を飲み込み」美味しそうだ」
小田島「咳払いし」火を通そうが、駄目に決まってるでしょ。そうですよ、会
長？」
みらい「とにかく今すぐ屋台を畳みなさい」
永倉「そんな殺生な！頼むよ。俺、どうし
ても今金が必要なんだ。な、この通りだ。
今回だけ」
みらい「駄目ったら駄目！」
と、屋台の撤去にかかる。

○聖エベレッタ学園・3年S組教室

教師「黒板に板書する。
教師「一定量の気体において体積Vが圧力P
に反比例し」

教師「よし乃、転寝する。
教師「これをボイル・シャルルの」

と、転寝するよし乃に陰しい顔を向ける。
よし乃の隣の席の女子生徒A、よし乃の
肩を揺すり、

女子生徒A「よし乃さん？」

よし乃「目を覚ます。」

教師「弘仲さん、そんなに僕の授業は詰まら
ないですか？」

よし乃「い、いえ！　そんなことは……　す
みません」

チャイムが鳴る。

教師「まったく、あなたにまで寝られたんじゃ
僕はもう」

×と、板書を黒板消しで消しだす。
×
×

囲碁を指す男子生徒。
 隅で一人、スクワットで汗を流す永倉。
 小巻を囲むクラスメイトたち。
 小巻、左胸のメテオブローチを自慢気に、
 小巻「地中海に新婚旅行で行った際に、死んだ主人からプレゼントされてね」
 女生徒C「へえ、さぞ高いんでしょ？」
 小巻「値段は関係ないわ。主人との思い出が詰まった大切なものよ」
 と、ブローチに視線を落とす。
 × × ×
 女生徒A「よし乃の席を囲む女生徒AとB。
 とはね。初めてじゃない？」
 女生徒B「本当ね。授業中は誰よりも熱心に先生の話に耳を傾けてるのに」
 よし乃「実は昨夜は年甲斐もなく夜更かししてね」
 女生徒A「へえ、やるじゃない。もしかしてデート？」
 よし乃「そんなじゃないわよ。これ」と、佑磨とツーショットで写るスマホの画像を女生徒AとBに見せる。
 女生徒A「誰、これ？」
 よし乃「剣佑磨。アニサキスっていうアイドルグループに所属してるんだけどね」
 女生徒A「あなた知ってた？」
 女生徒B「首を横に振る。」
 女生徒A「有名？」
 よし乃「全然。まだ駆け出しの子たちよ。そのライブが昨夜あったからそれでついうと」と
 女生徒A「いわゆる今流行の、えーとそういうのほら？」
 女生徒B「推し活」
 女生徒A「そう、推し活！」
 よし乃「今はまだ無名だけど、近いうちに必ず彼らは有名になるわ。それまで私が彼らの力になってあげたいの」
 女生徒AとB、よし乃をジッと見る。

よし乃「いい年して思った？」

女子生徒A「そんな全然」

よしと、首を横に振る女子生徒AとB。

よし乃「彼は私の今の生きがい」

と、スマホ画面に写った佑磨とのツーショット画像に目を落とす。

○同・生徒会長室

みらい、投書箱の用紙を机に広げ、一枚

ずつ目を通していく。

みらい「これもこれも、どれもシニア

クラスへの苦情じゃない！」

と、用紙を机の上に放り投げ、窓際に移

動する。

鍬を肩にかけ軽快な足取りで中庭を歩い

ていく永倉が見える。

みらい、眉間に皺を寄せる。

○同・体育倉庫の裏

一角に小さな畑が来ている。

永倉、口笛を吹きながら土に鍬を入れて

いく。

永倉、手を止め、首にかけた手拭いで顔

の汗を拭くと、近くで実をつけ始めたナ

スの畝に腰を下ろす。

永倉、ナスに鼻を近づけ、

永倉「旨そうな匂いだ。お前たち、大きな

つて一儲け頼むな」

みらいの声「何やってるの？」

永倉、驚いて振り返るとみらいが仁王立

ちで見下ろす。

永倉「こ、これは会長さん。こんなところで

どうされました？」

みらい「どうされたじゃないわよ！これは

一体どういうこと？」

永倉「これはその……いわゆる家庭菜園と

でも言うのか、しゃれた風に言うとかーデ

ニング？まあ、年寄りのたしなみよ」

みらい「たしなみね」

永倉「そうそう。植物と触れ合うことで心が

安定するし、年寄りにはもってこいの趣味
よ。あくまで個人的意見だけだな」
みらい「なら他でやって！勝手に校庭にこ
んなもの造って。どうせ、また学生に売り
つけて一儲けて腹だったんでしょ」
永倉「まさか」
みらい「とにかく今すぐ元に戻しなさい！
明日の朝までに戻ってなかったら強硬手段
に出るまでよ、いいわね！」
と、立ち去っていく。

○聖エベレッタ学園・校舎・外観（夕）
下校のチャイムが鳴る。

○同・体育倉庫の裏（夕）
永倉「永倉、ナスの畝の前で中腰になり、
と、折角実をつけたのにすまねえな」
と、苗を引き抜くと一輪台車に乗せる。

○聖エベレッタ学園・階段
みらい「朝来たらち乃、階段を降りながら、
ど、永倉さんには本当困ったものよ」
よし乃「隣で苦笑いを浮かべる。」
踊り場で蹲る女子生徒3（18）。
みらい「どうしたの？！」
女子生徒3「右足首を押さえ、痛そうに
顔を顰める。」
よし乃「階段から踏み外したのね」
みらい「保健室に連れていくわよ。よし乃さ
ん、肩貸して」
みらい「よし乃の手を借りて女子生徒3
を抱き起す。」

○同・保健室
茶と菓子を持ち寄ったシニアクラスの生
徒で賑わう室内。
艶っぽい雰囲気が漂う朝霧 静（32）、
男子生徒B（69）の皺だらけの背中に

静 「はい、これを貼り終え、

男子生徒B 「シャツを羽織り、

男子生徒B 「わしな、女房に先立たれてこう

マ助かるわ。ありがとうな、先生」

静 「何、このぐらいいのこといつでもやってあ

男子生徒B 「ホンマにか？ 先生みたいになわ

こうてべつぴんさんにこれから貼ってもら

えるなんてワシは幸せもんなやな」

静 「御世辞でも嬉しいわ」

男子生徒B 「御世辞とちゃうで。ホンマにそ

う思ってたねん。このスベスベの綺麗な

手」

と、静の右手に頬ずりする。

静 「その辺にしときましようか」

と、顔を引きつらせ笑う。

扉が開き、女子生徒3に肩を貸すみらい

とよし乃が部屋の視線が一斉にみらいに向

けられる。

○同・保健室の扉

筆書きで『不健全な保健室の利用を禁ず

る』という貼り紙が貼られている。

○同・保健室

静、みらいとよし乃に茶を出すと、事務

机の前に腰を下ろす。

静 「しかし、みんな追い出したらすっかり静

かね」

みらい 「これが健全な姿です。あの人たちは

保健室を茶飲み場としか思っていないんで

す」

静 「じゃあ、会長さんは何だと思ってる？」

みらい 「何ってそんなの怪我の治療を受けた

教室に通えない生徒の抛り所であるべきで

り、体調が悪い時に休む場所です。それに

教室に通えない生徒の抛り所であるべきで

り、体調が悪い時に休む場所です。それに

り、体調が悪い時に休む場所です。それに

り、体調が悪い時に休む場所です。それに

り、体調が悪い時に休む場所です。それに

り、体調が悪い時に休む場所です。それに

り、体調が悪い時に休む場所です。それに

す。それをあの人たちが奪ってるんです」
 静「本当にそうかな」
 静「と、窓際に移動する。」
 静「ちよつと来て」
 静「みらいとよし乃、窓際に移動する。」
 静「あそこにいるミキちゃん」
 窓から見える中庭ではミキと初栄がベン
 チに座り楽しそうに話している。
 静「あの子、以前はクラスに馴染めずに一
 の大半をここで過ごしてたのよ。他人とわ
 ろうともしないでベッドでスマホばかり弄
 ってた」
 静「静、窓からみらいに向き直り、
 たのがそんな彼女に熱心に声をかけ続けてくれ
 の孫と変わらないミキちゃんのことほつと
 けなかつたのね」
 よし乃「そうでしたか」
 静「初栄さんと出会わなければ今のミキちゃ
 んのあの笑顔はなかったかもね」
 と、中庭で満面の笑顔で初栄と話すミキ
 静「確かにここは教室に通えない生徒の抛り
 所の側面もあるわ。でも、ずっといる場所
 でもない」
 よし乃「深く頷く。」
 静「会長さんの言う保健室だと何だか味気な
 くない？ 私は茶飲み場的な方が好きよ。
 中にはスケベなのがいって手を焼くこともあ
 るけど。まあ、それも可愛らしいものね」
 みらい「そ、そんなの不健全だわ！」
 と、足早に部屋を出て行く。
 よし乃「会長さん？！」
 よし乃「よし乃、静を振り返り、
 と、頭を下げみらいを追って出て行く。」
 ○聖エベレッタ学園・校門（夜）
 みらい「すっぴん、急ぎ早に校門から出てくる。
 遅くなっちゃった」

と、通りを歩いていく。
みらいが歩き去った後に人影（この時点では足元しか見えない）が現れる。
人影、みらいの後に続いて歩き出す。

○道路（夜）

人気のない住宅街を歩くみらい。

後ろから迫ってくる足音。

みらい、慌てて振り返ると、息を切らしながら走り去っていくジョギング中の中年男性。

みらい「（息を吐き）驚かさないでよ」

と、覆面をした男（永倉）に肩にかけた

鞆をひったくられる。

鞆を持って走る覆面男。

みらい「ちよっと、待ちなさい！」

と、覆面男を追いかける。

× × ×

息も絶え絶えで走る覆面男。

みらい「絶対、その後ろを追いかける。」

と、履いていたローファアを脱ぎ、覆面

男に投げつける。

覆面男「（頭にローファアが直撃し）いて

っ！」

覆面男、足が纏れだす。

覆面男「もうこれ以上は……」

と、地面に倒れ込む。

みらい「覆面男に追いつき、

みらい「覚悟するのね」

と、覆面男ににじり寄る。

覆面男「悪かった。俺だ、会長さん」

と、覆面を剥ぎ取ると永倉の顔が現れる。

みらい「永倉さん！ 何で……」

永倉、息も絶え絶えで大の字で寝転ぶ。

○ファストフード店・中（夜）

窓際の席で向かい合うみらいと永倉。

みらい「お金ですか」

永倉「ああ。俺にはどうしても金が必要なん

だ。それで一儲けしようと色々画策してたんだが」
 みらい「私がそれを悉く邪魔した。だから腹いせに私からお金を？」
 永倉「（頷き）でも、今考えると浅はかだったよ。すまなかった」
 みらい「と、頭を下げる。」
 永倉「ただけど何でそんなにお金が必要？」
 みらい「また切実ね」
 永倉「実は俺、一年前に年甲斐もなく若い嫁さんを貰ってよ。そいつが今これで」
 みらい「と、両手で腹を膨らませる仕草をする。」
 永倉「生まれ最近のシニア恐るべしね」
 永倉「生まれてくるガキの為に長生きしたいんだよ。だから長命水がどうしても俺には必要なんだ」
 みらい「長命水って、あの如何にも胡散臭い水？」
 永倉「胡散臭いって」
 みらい「ホントのことでしょう？」
 永倉「まあ、いいや。とにかく最近、今までとは比べ物にならないくらい長生きに効く『長命水 n e o』が出てな。それが、一本いくらだと思う？」
 みらい「その質問答えないといけません？全然興味ないんですけど」
 永倉「そう言わずにさ」
 みらい「じゃあ、一万円」
 永倉「（首を横に振り）100万だ」
 みらい「ひゃ、100万円？！あんな胡散臭い水が？！絶対詐欺ですよ、それ。買わない方がいいですって」
 永倉「と、笑い出す。」
 永倉「まだ若い会長さんには分かんねえだろうよ。歳をとるってことがどんなに残酷か」
 みらい「みらい、真顔になる。」
 永倉「俺だって心底信じちゃいねえ。少しでも長生きする為に食べるものに気を付けた

り、運動して必死に抗ってはいる。でも、目に見えて体力は衰えていく一方だ。胡散臭くてもそれに縋るしかねえ自分がいてな。

情けねえ話だが」

みらい「永倉さん……」

永倉「俺、若い頃から荒んだ生活をしてきたから学校も真面に出ちやいねえ。でも、この年になって初めて家族と呼べるものを手に入れた。ちゃんとした父親になりてえんだよ」

みらい「それで学園に？」

永倉「ああ。若い頃は死ぬなんて屁でもないと思つてた。血の気が多くて鉄砲玉食らつて死にかけたことも一度や二度じゃねえ」

みらい「て、鉄砲玉……」

永倉「でも、今は違う。一日でも長く生きていたい」
と、みらいをジッと見る。

○聖エベレッタ学園・水飲み場（早朝）
薄闇が広がる中、蛇口が並ぶ。

○同・中庭（早朝）

永倉、背中にリュックサックを背負い、校舎の陰から周りを気にしながら出てくる。

小田島の声「あれ、永倉さんじゃ」

永倉、驚いて小田島を振り返る。

小田島「やつぱり。こんな時間にどうしたんですか？」

永倉「あ、いや。その……散歩で近くを通

つたもんだから」

小田島「散歩ですか、こんな早くに？」

永倉「悪いか？ それに年寄りは大抵朝は早

いもんだ。お前こそこんな時間に何やって

んだ？」

小田島「今生徒会では校内の美化活動に力を

入れてまして。交代で早く来てゴミ拾いや

その他諸々の清掃をやってるんです」

永倉「ほう、感心だな。まあ、精々励んでく

れや。それじゃあ、俺はこれで」
 小田島「待つてください、永倉さん！」
 永倉「な、何だよ？」
 小田島「ちよっといいですか？」
 と、永倉の腕を強く掴む。
 永倉「俺は何も悪いことはしてない、してないぞ」
 と、首を頑なに横に振る。
 × × ×
 周囲が白み始めている。
 永倉「女心ね。俺もこの年までベンチに腰掛ける。ど、そればかりはどうも」
 小田島「またまた。皆噂してますよ、孫ほど若い奥さんを貰ったって。隠してるだけで何かあるんでしょ？ 必勝法が」
 永倉「必勝法ね。そんなものはねえな」
 小田島「そんな……」
 永倉「まあ、強いて言うなら押して押しまくれだ」
 小田島「押して押しまくる？」
 永倉「俺だって最初から今のカミさんに相手にされてたわけじゃねえ。でも、会うたびに好き好き言ってたからそのうち向こうも根気疲れしたのか俺に気を許してきてよ」
 永倉「立ち上がり、
 永倉「結局欲しいものを手に入れるのは最後まで諦めなかったヤツだ。お前もうじうじ言っただけで先ずは行動しろ」
 小田島「行動か」
 永倉「青年、人生は長いようで案外短いぞ。うじうじ悩んでる間に直ぐ年を食っちまう。後悔しない為に自分の人生をちゃんと生きろ。先に年を食ってきて言えることはそんなぐらいだ」
 小田島「立ち上がり、
 小田島「分かりました、先生！」
 永倉「よし、頑張れ。それじゃ、俺はこれで」
 と、重そうにリュックサックを背負う。

小田島「随分重そうですね、それ。何が入
 てるんですか？」
 永倉「こ、これか？！　べ、別に大したもん
 じゃないよ。じゃあな」
 と、足早に立ち去っていく。
 ○聖エベレッタ学園・渡り廊下　水飲み場
 小田島「永倉さんが自主退学？！」
 よし乃「ええ。私たちクラスメイトも急なこ
 とで戸惑ってるんです。何があったのかし
 ら」
 よし乃「よし乃、考え込むみらいを見て、
 みらい「あ、はいっ」
 よし乃「何か知りませんか？」
 みらい「知らない、知らない」
 小田島「と、慌てた様子で首を横に振る。
 小田島「僕、今朝早く学校で会いましたけ
 ど」
 みらい「朝早くって何時ごろ？」
 小田島「確か6時過ぎだったかな。今日は美
 化活動で早出だったから」
 みらい「そんな時間に一体？」
 小田島「本人は散歩のついでに立ち寄ったと
 言っていましたけど」
 みらい「他に何か話さなかったの？」
 小田島「それはまあ色々」
 みらい「色々って？」
 小田島「嫌だな。そんなことこで言えるわ
 けないじゃないですか、勘弁してください
 よ」
 と、照れくさそうに体をよじる。
 みらい「ちよっと何？　怖いんだけど」
 よし乃「あの人が何かしら？」
 水飲み場に出来た生徒の人だかりに目を
 向けるみらいたち。
 ×××
 みらい「並んだ蛇口が全て根こそぎ無く

なっているの見て、

みらい「一体誰が……」

よし乃「私、ニュースで見たことあります。

公園とかの蛇口が盗まれてる事件。高く売

れるって」

小田島「あっ！」「

みらいとよし乃、驚いて小田島を振り返

る。

みらい「な、何よ。急に？！」

小田島「そう言えば、永倉さん重たそうにリ

ュック背負ってました」

よし乃「ひょっとして永倉さんが？」

みらい「最後までやってくれるじゃない」

と、皮肉に笑う。

○同・生徒会室（タ）

よし乃、小田島が段ボールに荷物を詰め

込むのを傍で見届ける。

よし乃「何も辞めなくても」

小田島「いえ。犯人が近くにいるのにおめお

め見過ごすようじゃ副会長失格です。それ

に会長からも烙印押されましたしね」

よし乃「私からもう一度会長さんに」

小田島「いいんです。そもそも僕は会長の傍

にいられるような器じゃなかったんです」

小田島、手を止め、

小田島「でも、何も出来なかったな」

と、悲しそうに虚空を見上げる。

よし乃「小田島くん……」

小田島「それじゃ、僕はこれで。生徒会のコ

と、これから陰ながら応援してます」

と、段ボール箱を手に部屋を出て行く。

○同・生徒会長室（タ）

みらい、窓際に立ち、段ボール箱を手に

中庭を歩いていく小田島を見下ろす。

扉を叩く音がし、

みらい「どうぞ」

と、窓際から慌てて離れる。

扉が開き、

よし乃「会長さん、ちょっといいですか？」
 みらい「なに？」
 よし乃「と、机に腰を下ろす。」
 気？
 みらい「仕方ないわよ、本人が辞めるって言
 うのをどうしろって言うの？」
 よし乃「小田島くん、本当は会長さんが止め
 てくれるのを待ってたんじゃないかしら」
 みらい「ふっ、なぜ私が止めないといけない
 の？」
 よし乃「なぜって」
 みらい「まずバスに適切な人を乗せ、不適切
 な人は降ろす。組織論の鉄則よ」
 よし乃「また本の受け売り？」
 みらい「う、うるさいわね」
 よし乃「鉄則だか何だかは知らないけど、そ
 んな簡単に割り切っちゃダメ！」
 みらい「そもそも彼は危機管理能力に欠けて
 る。すぐ傍に犯人がいて見逃すなんて。私
 ならそんなヘマはしない」
 よし乃「ホントにそう言い切れる？ それに
 犯人がまだ永倉さんと決まったわけじゃ」
 みらい「犯人は永倉さんよ」
 よし乃「根拠は？」
 みらい「根拠も何も、永倉さんには前科が」
 よし乃「前科？」
 みらい「と、とにかく状況証拠から見ても永
 倉さんで間違いない。議論の余地なし」
 よし乃「何ですか、それ。横暴だわ」
 みらい「あー、うるさいわね！ 私は忙しい
 の。さあ、出たって」
 よし乃「この分からず屋の業突く張り！」
 と、立ち去る。
 みらい「（体を机から乗り出し）ちよっ
 と！」
 音を立て扉が閉まる。
 みらい「業突く張りってどういう意味よ
 ……」
 と、椅子にドカツと腰を下ろす。

○動く車の中（朝）
 通「乗せ座る小巻。後部座席にマルチーズを膝
 通「母さん、ちょっといいですか」
 小巻「何かしら」
 通「友梨奈のこともう少し認めてやってくれ
 ませんか。彼女は彼女なりに頑張ってるわ
 けだし」
 小巻「あら、そうだったの」
 通「そうだったのって……随分つれない
 な」
 小巻「どうせあの女にそう言えって言われた
 んでしょ？ お前、随分あの女に頭が上が
 らないのね。若いだけ取り柄の女、何が
 良いのやら」
 通「母さん、そんな言い方はよして下さい。
 僕は只、二人に仲良くしてほしただけで
 す」
 小巻「ならお断り」
 通「お願いしますよ。このままだと母さんと
 は……」
 小巻「と、言葉に詰まる。」
 通「それは、その」
 小巻「はつきり仰い！ そんなだから一回り
 も下の女に尻に敷かれるの。情けない子だ
 よ」
 通「なら言いますけど、今のままだととも
 じやないけど母さんとは暮らせません」
 小巻「だから施設にでも入れようって算段」
 通「不意ながらそれもやむなしですね」
 小巻「ドラクワちゃん、聞いた？ 母さん
 は今、実の息子に捨てられようとしているの
 よ。あんなにお腹を痛めて産んだのに」
 通「何を馬鹿なことを」
 小巻「私の味方をしてくれる人はもう誰もい
 ないわ」
 小巻「マルチーズ、小巻の顔を舐める。
 と、マルチーズに頬ずりする。」

○聖エベレッタ学園・3年S組教室

チャイムが鳴る。

男子生徒C（77）とD（71）、鞆に

教科書を仕舞い、帰り支度をしながら、

男子生徒C「終わった、終わった。どうだ、

これから一杯？」

男子生徒D「お、いいね。行こ、行こ」

軽快に教室を出て行く男子生徒CとD。

小巻、教科書を鞆に仕舞い終え、足元で

伏せるマルチーズに、

小巻「私たちも帰りましょうか、ドラクロワ

ちゃん」

マルチーズ、起き上がり、『ワン！』と
鳴く。

○同・廊下

下校する生徒たちで賑わう。

小巻、マルチーズを抱え歩いていく。

芋飼の声「小巻！」

小巻、人込みの中に学ランを着た芋飼の

幻影を見る。

小巻「あなたなの？ でも、なぜ……」

芋飼、小巻に微笑みかける。

○同・階段

芋飼、軽快に階段を駆け上がっていく。

後ろを手すりに掴まりながら息も絶え絶

えに追いかける小巻。

小巻、足が止まり、

小巻「待ってくださいな。あなたは何でそん

なに平気なの？」

芋飼「お前に見せたいものが。さあ、おい

で」

マルチーズ、小巻の腕からすり抜け、芋

飼を追いかけていく。

小巻「あ、ドラクロワちゃん！」

と、再び階段を上っていく。

○聖エベレッタ学園・屋上（夕）

鮮やかな夕焼け空が広がる。

小巻、マルチーズを膝に乗せ、一人換気口の上に腰かけ、夕焼け空に見入る。

小巻「きれいだ……」
と、まるで誰かがいるかのように隣を振り向き、微笑みかける。
小巻、上着のポケットから『鯛、マグロ入り』と書かれた魚肉ソーセージを取り出し、包装フィルムを剥く。
小巻、隣を振り向き、魚肉ソーセージを手渡すように差し出す。
マルチーズ、『ワン！』と鳴くと物欲しそうに魚肉ソーセージをせびる。
小巻「分かった、分かったわよ。あなたにもあげるから大人しくして頂戴。はしたない子ね」
と、マルチーズに魚肉ソーセージを与える。

○みらいの自宅・リビング（夜）

テレビからニュースが流れている。
頭にタオルを巻き、寝間着姿のみらいがソファで寛いでいる。
アナウンサーの声『長命水』と銘打ち水道水を高齢者に高額で売りつけた自称『天子』の男が詐欺の容疑で逮捕されました。
尚、これまでの被害額は少なくとも一億円以上に上るとみて」
みらい、麦茶を飲む手が止まる。

○聖エベレッタ学園・屋上（夜）

小巻、換気口に腰かけ虚ろな表情で鼻歌を口ずさんでいる。
風が小巻の髪を揺らす。
小巻「あら、すっかり暗くなって。冷えてきたし帰りましょうか、ドラクロワちゃん？」

マルチーズ、『ワン』と鳴く。
小巻、マルチーズを抱いて立ち上がる。

○よし乃のアパート（夜）

よし乃、スマホで電話を掛ける。

よし乃「あ、佑磨君？ 弘仲で……」

『お客様の掛けになった電話番号は現在使われていないか……』という自動音声流れる。
よし乃、かけ直すが、自動音声が再び流れる。

○聖エベレッタ学園・生徒会室

ホワイトボードには『偶数月15日におけるジャンボ焼きそばパン販売禁止の取り決め』と書かれている。

女子議長「それでは今から採決に移ります。賛成、反対のどちらかに挙手をお願いします。」

……

よし乃の深いため息が漏れ聞こえてくる。
女子議長「弘仲さん、どうかされましたか？」

よし乃「あ、いえ。すみません」

みらい「よし乃さん、最近変よ。どこか身が入ってないっていうか。弛んでるわよ」

よし乃「すみません」
みらい「やる気がないなら出ていけば。はっきり言ってる今のあなたは足手まといよ。全体のお気を下げないで」

女子議長「会長、何もそこまで」
よし乃「いえ、会長の言う通りです。分かりました。失礼します」

と、駆け出て行く。
女子議長「あ、よし乃さん！」

みらい「追わなくていい！」
女子議長「でも」

みらい「つつたく。後お願い」
と、よし乃を追いかけて教室から出て行く。

○同・中庭

よし乃、ベンチに腰掛け、顔をハンカチ

で押さえ肩を震わせ泣く。
みらい「最近のよし乃の隣に腰を下ろし、
かあったの？」
みらい「横目で嗚咽するよし乃をチラツ
と見て、
みらい「悪かったわよ、ちよつと言い過ぎた。
でも、私も好きで言ってるわけじゃないん
だからね。会長としてその」
よし乃「違うの。私、自分で自分が情けなく
て。いい年して何やってんだろって」
と、みらいの胸で泣き崩れる。

○ビルの一角

『三鷹芸能事務所』の表札が掛かった扉
の前でインターホンを執拗に鳴らすみら
い。

みらい「すみません。剣 佑磨さんのこと
お話が。いるなら出て来て下さい」

と、扉を叩き始める。
よし乃「きつと留守よ。帰りましょ」

みらい「駄目よ。ちゃんと話つけるまでは」
と、新聞受けから室内を覗き込む。

三鷹の声「何か？」

口ひげを蓄えた三鷹 宏（67）がレジ
袋を手にみらいとよし乃に怪訝な表情を
向ける。

○同・事務所内

『剣 佑磨』の宣材写真が飾ってある。
みらいとよし乃、革張りの椅子に三鷹と
向かい合って座る。

部屋に物は殆どなく閑散としている。
三鷹「そうでしたか。佑磨のヤツ、あなたの

大切なお金まで。本当に申し訳ないことを
しました」

よし乃「頭を深々と下げる。
と、頭を深々と下げる。
よし乃「佑磨くんは今どこに？ 本人と話さ

三 鷹「それがいー
 三 鷹「それが私もさっぱりで」
 三 鷹「何それ？ 事務所ぐるみで彼を庇つ
 三 鷹「そんな許さないから」
 三 鷹「そんなでもない。本当に分らないんで
 す。それに、私だってあいつには話したい
 ことが山ほどあるんだ！」
 と、テーブルに右拳を強く叩きつける。
 三 鷹「あの野郎、事務所の有り金全部持ち出
 して、その上……ふっ、ふはははっ」
 と、高笑いし出す。
 みらい「な、何？！」
 よし乃「さ、さあ」
 三 鷹「あいつはね、私から何もかも奪ってい
 ったんですよ。もう悔しくて悔しくて」
 三 鷹「テーブルに泣き崩れる。」
 書斎机に飾られた写真立てには三鷹と佐
 磨、それに若い女性（三鷹の妻）が笑顔
 で写っている。
 三 鷹「三鷹、鼻をティッシュで噛むと、
 よし乃「情けない姿をお見せして申し訳ない」
 れるなんて。お気の毒に」
 みらい「年甲斐もなく若い奥さん貰うから
 よ」
 よし乃「ちよっと、会長さん」
 三 鷹「お嬢ちゃん言う通りだ。若い妻を貰
 う上で覚悟はしていたが、実際となると。
 私の目を盗んで二人があんなことやこんな
 ことをしてたと思うと、あああつ！」
 と、頭を掻き毟る。
 三 鷹「私はね、あいつのアイドルとしての資
 質を誰よりも買ってたんだ。あいつには我
 々凡人にはない華があるんです。アイドル
 になるべくして生まれてきたと言っても過
 言じゃない」
 よし乃「私もそう思います」
 三 鷹「あれだけあいつに投資してきたか。タワ

マンに住まわせ、ハイブランドの服に外車。
 それに整形だつて！
 よし乃「せ、整形？！」
 三鷹「あいつの顔は殆ど作りものです。弄つ
 てないところはないくらいだ」
 よし乃「ガクツと肩を落とす」
 三鷹「良かったら上京当時の芋臭いあいつの
 写真見ますか？」
 よし乃「頑なに首を横に振る」
 三鷹「とにかく私なりに愛情を持つてあいつ
 を育ててきたつもりです。それをこんな形
 で返されるとは。飼いだに噛まれるとはま
 さにこのこと。情けないと言うか正直、立
 ち直れんですわ」
 よし乃「社長さん……」
 三鷹「でも、佑磨のヤツがあなたからだまし
 取った金は私が必ず何とかしますから」
 みらい「何とかがつて？ 失礼ですけど今のあ
 なたに返済能力があるとはとても思えませ
 んけど」
 三鷹「何、いざとなれば内臓の一つや二つ売
 ったって。私、我慢じゃないけどこの年ま
 で内臓は壊したことなくてね。高く売れる
 と踏んでるんです」
 三鷹「ズボンのポケットから財布を取り
 出し、
 三鷹「手持ちこれしかありませんけど、取り
 敢えず今日はこれで。次までには必ず用立
 てておきますから」
 と、千円札3枚をよし乃に差し出す。
 よし乃「千円札3枚をジッと見詰めたま
 ま受け取ろうとはしない。部屋を探せば
 三鷹「ちよつと待ってくださいね。部屋を探せば
 もう少し出てくるかもしれない」
 と、立ち上がり部屋を物色し出す。
 よし乃「三鷹の靴下の踵が薄くなってい
 るのを見て、
 よし乃「お金はもういいですから」
 三鷹「いや、しかし」

よし乃「本当に結構です。それじゃあ」
と、立ち上がり出て行こうとするが直ぐ
よし乃「めげずに頑張ってくださいね。また良
いこともきつとあるわ」
と、足早に部屋を出て行く。
みらい「ちよつと、よし乃さん！」
みらい「よし乃を追って部屋を出て行く。」

○公園（夕）

みらい「ベンチに腰掛けるみらいとよし乃。
たの？ 老後の資金に貯めてた大事なお金
なし乃「ええ。でも、もういいの」
みらい「何がいいのよ？」
よし乃「私も悪いのよ。年甲斐もなく若い子
に入れあげて。今回の件でいい勉強になっ
たわ」
みらい「あの社長さんが自分より惨めに思え
たから？」
よし乃「えっ？」
みらい「それで無理して自分の気持ちを押し
殺してるだけじゃないの？」
よし乃「別にそんなこと」
みらい「言っておくけど、よし乃さんみたい
な人一生幸せにはなれないと思う。それじ
やあ」
と、立ち去っていく。
よし乃「会長さん……」
と、去っていくみらいの背中を寂し気に
見届ける。

○聖エベレッタ学園・外観
火災ベルが鳴り響く。

○同・廊下
生徒たちの人だかりが出来ている。
小巻、火災ベルの脇に立ち、

小巻「今警察を呼んでやったからね、覚悟お
 し。この中に私の大切なブローチを盗んだ
 盗人があるのは分かっているんだ！」
 よし乃「小巻さん、落ち着いて。火災ベルじ
 や警察は来ないのよ」
 と、火災ベルを手際よく止める。
 みらい「一体何の騒ぎ？」
 女生徒A「体育の授業中に更衣室から小巻さ
 んのブローチが無くなってね。それでクラ
 スの中に盗人がいるって」
 人だかりの女子生徒1と2、大声を上げ
 る小巻を見て、
 女子生徒1「また騒いでるよ。ホント迷惑な
 人たち。昭和世代意味不明」
 女子生徒2「私たちとは根本的に違うんだっ
 て。もう関わるのよそ。いこいこ」
 と、その場を立ち去っていく。
 小巻「（周りの生徒を見渡し）あんたたちは
 本当に卑しい貧乏人だね。金持ちを妬むこ
 としか出来ないんだ。さあ、返して頂
 戴！」
 よし乃「小巻さん、それは言い過ぎよ。それ
 に皆知らないって。クラスメイトを疑うの
 は良くないわ」
 小巻「じゃあ、他に誰が盗んだって言うんだ。
 この中に手癖の悪い泥棒猫が」
 小巻「そう、さてはあなた」
 よし乃「何を言うの？」
 小巻「あなた、最近若い男に入れあげて、結
 果大金を騙し取られたってね。聞いたわ」
 よし乃「誰がそんなこと」
 と、みらいを見る。
 みらい「違う、違う」
 と、首を頑なに横に振る。
 女生徒AとB、気まずそうにその場から
 立ち去る。
 小巻「如何にも優等生ぶってあんたみたいな

のが結局一番質が悪いんだ。金に困ってやつたんだろ。返してよ！」
小巻「よし乃、やめて頂戴、小巻さん。私じゃないわ」
小巻「白々しい、この泥棒猫！」
みらい「よし乃の髪の毛を引っ張る。」
みらい「二人ともやめて！！」
みらい「よし乃から小巻を引き離す。」
みらい「芋飼さん、真犯人は私が責任もって必ず突き止めるから一旦この件は私に預けて頂戴」
小巻「言ったね、その言葉信じていいんだね？」
みらい「も、勿論よ」
みらい「よし乃、髪の毛の乱れを直しながらみらいを見る。」

○同・生徒会長室（夕）
みらい「皆の前でつい大見得切って真犯人を見つけるとは言ったものの、どうしよう」
みらい「と、頭を抱える。」
みらい「（首を横に振り）いかんいかん。なに弱気になってる、鯉登みらい。これ以上学園の秩序と平穏を乱すわけにはいかないのよ」
と、顔を上げる。
と、ノックの音がし、
よし乃「失礼します」
よし乃「と、扉を開け部屋に入る。」
よし乃「用って何かしら？」
みらい「その、この間は騙し取られたお金に未練がないような口ぶりだったけど、それって本心なの？」
よし乃「何それ？ 私がお金に困って小巻さんのブローチを盗んだとでも？」
みらい「そういうわけじゃ」
よし乃「じゃあ、何でそんなこと聞くの？ 会長さんもやっぱ私が犯人だと思ってる」

のね」
みらい「私は只、真犯人を見つけたいただけ。
その為に必要なことを確認したまでよ」
よし乃「必要なことって何よ。結局私が第一
容疑者ってことじゃない。あんまりよ！」
と、部屋を飛び出していく。
みらい「あっ……」
みらい「椅子に腰を下ろし、
みらい「あー、もう！」
と、頭を掻き毟る。

○同・3年S組教室（夕）
女生徒A「よし乃さん、今会長に呼ばれてる
らしいわよ」
女生徒B「やっぱよし乃さんが犯人？」
女生徒A「ほぼ間違いないわね。私ね、前か
らあの人には一癖あると睨んだのよ。若
い子にのぼせちゃって。あーいやらしい
っ」
女生徒B「本気で相手にしてもらえと思っ
てたのかしら。だとしたら滑稽だわ」
女生徒A「本当ね。私、これからはあの人と
の付き合い方考えることにする」
女生徒B「あっ」
女生徒Aが振り返ると、入り口でよし乃
が立ち尽くしている。
女生徒A「（気まずそうに）何だ、いたの」
よし乃、教室を駆け去っていく。

○聖エベレッタ学園・生徒会室
男子生徒会役員（18）、ホワイドボ
男子生徒会役員「よし乃さん、最近どうした
んだろ。学校にも来てないって聞くし」
女子議長「会長と何かあったんでしょ。近頃
の会長、かなりやりすぎのところがあ
るし」
男子生徒会役員「一件以来犯人捜しに血眼よ
押し切って全員の持ち物検査を強行するわ、

やりすぎな感はない

女子議長「あれ以来、シニアクラスに留ま

ず現役世代からも反感買うし。感じない、今の殺気だった空気が」

ガラスの割れる音が響く。

驚いて顔を見合わせる女子議長と男子生徒会役員。

割れた窓ガラスの破片とともに床に転がる握りこぶし大の石。

○よし乃のアパート（夕）

みらい「こい、扉の前で紙切れを手に、

みらい「ここね」

『弘仲』の表札が掛かっている。

みらい「呼び鈴を連打し、

みらい「鯉登です。よし乃さん、いるんでし

よ？ 出て来て！」

と、扉を叩き始める。

みらい「学校に來なくなるなんてどういうつ

もり？ 私があなたを疑ったこと怒ってる

の？」

みらい「扉を叩く手を止め、

みらい「疑ったぐらいで何よ。やましいこと

がないなら堂々としてればいいじゃない。

それともやっぱり」

みらい「郵便受けの隙間から中を覗く。

みらい「驚いた表情で」嘘？！」

薄明りの中、部屋中に溢れかえったゴミの山が見える。

○聖エベレッタ学園・茶道部・茶室

みらい「茶をたてるとみらいに差し出す。

みらい「首を横に振り」今はそんな気分じ

やない」

出雲「犯人捜し上手くいってないんだ」

と、茶碗を脇に置く。

みらい「頷き、

みらい「一斉に全校生徒の持ち物検査までし

て徹底的に調べたのに手掛かりひとつなし。

まるでブローチに足でも生えて独りでにい

なくなつたとしか―

出雲「顎に手を当て考え込む。」

みらい「ちょっと冗談よ。そんな真剣に取らないでよ―

出雲「ええ、それはないと思う。ただ―

みらい「ただ？―

出雲「座敷わらし―

みらい「何それ？―

出雲「子供の妖怪。悪戯でモノを隠すって聞いたことがある。おかつぱ頭の5歳ぐらい

の女の子で―

みらい「もしかして前髪ばつん？―

出雲「ええ、それは思つてゐる以上に―

みらい「二度頷く。」

出雲「実は最近渡り廊下を小さな女の子が一人で歩いているのを見たつて子が何人もいてね―

みらい「見た見た。私も見た！―

出雲「ホント？！―

みらい「それよ！犯人はその女の子、いや座敷わらしで間違いないわ―

と、部屋を飛び出していく。

出雲「あ、ちよつと！―

出雲「あ、ため息を漏らし

出雲「あの子、大分追い詰められてゐるわね―と、茶を啜る。」

○学園・渡り廊下脇の植え込み（タ）

みらいと出雲、植え込みから渡り廊下を窺う。

みらい「大きい、大きな数珠とロザリオを首から掛け、右手に祓串、左手に御札を握る。」

出雲「その恰好何？―

みらい「相手は妖怪だよ。これぐらいの備え

で臨まない―

出雲「呆れた―

みらい「来た来た！―

おかつぱ頭の女兒、鼻歌交じりに軽快な

足取りで廊下を進む。

みらい「成敗してやるわ、覚悟！！―

と、女兒に向かつて駆け出す。
出雲「ちよっと！」
と、みらいを追いかけて植え込みを飛び出す。

○同・渡り廊下（タ）

男子生徒E（66）の懷でしゃくり泣く女児。

傍らで気まずそうに立つみらいと出雲。
男子生徒E「よしよし、じいじがいるからも

う平気だよ」
みらい「放課後に孫の世話って、ここは託児

所じゃないんだからね。紛らわしいにも程があるわよ」

出雲「ちよっと、みらい！」
男子生徒E「どうもすみません。保育所が終

わってこの子を見てやれる人間が私しかいないもんですから」

みらい「結局また振り出したか。犯人は座敷わらしで決まりだと思ったのに」

と、肩を落とす。
みらい「仕方ない。かくなる上は」
と、顔を上げる。

○聖エベレッタ学園・3年S組教室

小巻、自分の席でマルチーズと戯れる。
女生徒Cの声「芋飼さん、会長さんが呼んで

るわよ」
小巻、教室の入り口を振り返ると、みらいが気まずそうに立つ。

○同・前廊下り下り階段

廊下を生徒たちが行きかう。
マルチーズを抱きかかえた小巻、みらい

を前にして、
小巻「何の用かしら？ ドラクロワちゃんの

ことなら前から言ってるように」
みらい「そうじゃないの。その……ブロー

チのことだね」
小巻「ブローチ？ ああ、それならほら」

と、左胸につけたメテオのブローチをみ
 小巻「無くなっと思ったってたらちゃんと家に
 あったわ。一時はどうなるかと心配したけ
 ど見つかった。行いでたしめでたし。これも母
 さんの日頃の行いがいいおかげね、ドラク
 ロワちゃん？」
 マルチーズ、ワンと鳴く。
 みらい「何それ？」
 小巻「えっ？」
 みらい「ふざけないで！！」
 と、廊下に響き渡り一斉に生徒たちがみ
 らい「周りを犯人扱いして散々騒いどいて
 よくよく探したら家にあつた？ はあ？
 それで済むと思つてんの？ 馬鹿にしない
 でよ！」
 小巻「そんなに目くら立てなくてもいいで
 しよ。怖いわね、ドラクロワちゃん？」
 みらい「よくそんなことが言えるわね。火災
 報知器まで鳴らして騒いだくせに」
 小巻「待つて頂戴、一体何のこと？ 私はそ
 んなはしたない真似は絶対にしません！
 言いがかりはよして。さあ行きましょ、ド
 ラクロワちゃん」
 と、その場を立ち去る。
 みらい「呆れた、シラを切るの？」
 小巻「シラを切るも何も全く身に覚えのない
 ことです！」
 と、下り階段に向かつて廊下を進む。
 小巻の後に続いて行くみらい。
 みらい「待ちなさいよ！ そのブローチのせ
 いで私がどんな思いをしたか」
 小巻「スタスタと歩く。」
 みらい「小巻の腕を掴み、
 小巻「しつこいわね、知らないって言つて
 の！」

と、みらいの手を振り払うが、バランスを崩し、階段から足を踏み外す。

小巻「ドラクロワちゃん、危ない！」

マルチーズを庇うように抱きかかえ階段

を転がり落ちていく小巻。

小巻、踊り場で蹲り動かなくなる。

マルチーズ、小巻の懷から這い出て来て、

小巻の顔を舐める。

男子生徒の声「大変だ。階段から人が落ちたぞ。」

小巻に駆け寄る数人の生徒。

みらい「わ、私は悪くない……」

と、唇を震わし、その場に立ち尽くす。

○聖エベレッタ学園・中庭

鉢巻きをした数人のシニア生徒が『血も

涙もない鬼畜を学園から追放しろ！』

『鯉登会長は年寄りの敵』などのプラカ

ードを手に立つ。

女生徒C（68）、通りかかった女子生

徒4（16）と5（16）を呼び止め、

女生徒C「現会長のリコールを求める署名活

動にぜひ協力をお願いします」

女子生徒4と5、互いに顔を見合わせる。

女生徒C「あなたたちも知ってるでしょ？」

現会長の悪行は。罪のないそれも認知症の

女性に怪我を負わせておいて未だに謝罪も

なく、会長の座に居座り続けている。彼女に

は正義の鉄槌が下されるべきよ」

女子生徒4「分かりました」

と、用紙に署名する。

女生徒C「ありがとう。さあ、他の人たちも

署名に是非ご協力を」

と、周りに集まる生徒たちに呼びかける。

○同・理事長室（タ）

安城「みらい、机の前の安城と対峙する。

っ、もう少し君はうまくやってくれと思

っていたが、どうやら私の見込み違いだっ

たようだ」

安城「みらい、ムツとした表情を浮かべる。
 いたいたのかね、芋飼さんの認知機能に問
 題があることは？」
 みらい「いえ、そんなの全く知りませんでし
 た」
 安城「無理もないか。御家族でさえ今回医者
 から初めて聞かされて驚いていたぐらいだ
 しな」
 と、立ち上がり、窓際に移動する。
 安城、中庭で署名活動に協力する現役世
 代の生徒の集まりを見下ろし、
 安城「今回の件では君に味方するものはいな
 いだろう。知らなかったとは言え、認知症
 のお年寄りに必要以上に迫り、怪我まで負
 わせたわけだからな」
 みらい「わざとじゃありません、あれは事故
 です！」
 安城「君は何も分かってないな」
 みらい「えっ？」
 安城「君が言うように事故だとしても、肝心
 なのは事実じゃない。世間がどう見るかだ。
 気の毒だが君に分はないよ」
 みらい「そんな……」
 安城「悪いことは言わない。暫く休みなさい。
 それが君の為だ」
 立ち尽くすみらいの顔に西日が射し込む。
 ○同・下駄箱（タ）
 生徒たちが上履きから下履きに履き替え、
 下校していく。
 みらい、下駄箱の扉に手をかける。
 × × ×
 （フラッシュ）
 理事長室で、
 みらい「それは事実上の停学処分ということ
 ですか？」
 安城「そう捉えてもらって差し支えない」
 × × ×
 みらい「ふざけんな！！ 何で私が！」

と、靴箱の扉を強く叩く。
みらい「―首を横に振り―これくらいのこと」

と、靴箱の扉を開ける。
みらい「嘘でしょ……」
ボロボロに切り刻まれたローファーが鎮座する。

○同・中庭（タ）

みらい、上履きで校門に向かって足早に進む。

男性の声「さっさと辞めろ！！」

みらい「いたっ！」

と、額を押さえその場に屈む。

駆け去っていく男子生徒3（18）。

額から手を離すと、真っ赤に染まるみらいの手のひら。

女生徒D（82）、みらいに歩み寄り、女生徒D「大丈夫かい？　まあ、大変。血が出てるよ」

みらい、齒噛みし、その場を駆け去る。

○同・保健室・前廊下（タ）

みらい、ハンカチで額を押さえながら、『保健室』の表札が掛かる扉の前に立つ。

みらい、扉に手をかけるが中から、男生徒Cの声「歩いてたら二人組の若造にいきなり後ろからだ。年寄りにはサッサとくたばれだ」とさ

静の声「足首に湿布しとくわね。軽い捻挫だとは思うけど、念のために病院には行つてよ」

男生徒Cの声「一体、俺たちが何した？

悪いのは全部あの娘じゃねえか。あいつのせいで学園は滅茶苦茶だ。今度あの娘を見たら俺はたじや済まさねえよ」
扉の前にみらいの姿はすでない。

○聖エベレッタ学園・生徒会長室前

出雲、『会長室』の表札がかかる扉の前で立ち尽くす。扉には『ご愁傷様』『学園の恥』『さつさと辞める！』『死ね』などのみらいを誹謗中傷する貼り紙が貼られている。

小田島の声「こりや、また酷いな」

出雲「小田島、貼り紙を剥がし始める。」

小田島「へ貼り紙を剥がしながら、会長が学校に来なくなつて一週間。批判は収まるどころか激しくなる一方だね。裏掲示板なんて見られたもんじゃないよ」

出雲「みらい……」

小田島「会長の良さは僕にしか分かんないんだね。みんな見る目ないな」

出雲「そうね」
と、小田島と一緒に貼り紙を剥がす。

○道路

みらい、制服姿でスマホの裏掲示板を閲覧しながら歩く。

『排斥だ、排斥しろ』『もう学校で顔も見たくない。このままフェードアウト希望』『会長失格。ていうか、それ以前に人間失格』『年寄りはあの小娘にみんな殺される』などの投稿が並ぶ。

みらい、スマホを手に立ち尽くす。
と、消防車がサイレンを鳴らしながらみらいの横を通り過ぎていく。

みらい、黒い煙が立ち上る建物へよし乃のアップルトを見て、

みらい「よし乃さん……」
と、駆け出す。

○よし乃のアップルト前道路

黒煙が上がる建物に向かって放水する

消防士たち。
野次馬の人だかりが出来ている。

みらい、人だかりを掻き分け、先頭に躍り出る。

みらい、よし乃の部屋が激しく燃えているのを見て、

みらい「よし乃さん！」

アパート住民の声「火元の部屋にまだ人

が！」

みらい「えっ」

爆発音がし、よし乃の部屋の窓ガラスが吹き飛ぶ。

消防士「危ないですから下がって！」

みらい、消防士の制止を振りきり、

消防士「あ、君！！」

みらい、炎に包まれる建物に飛び込んでいく。

○同・よし乃の部屋

溢れかえるゴミに燃え広がる炎。

みらい「みらい、ゴミの山に足を盗られつつ進む。

みらい「よし乃さん？！」

と、ハンカチで口を押え咳き込む。

ゴミの山にうつ伏せで埋もれるよし乃を

発見し、

みらい「よし乃さん！」

と、ゴミの山からよし乃を抱き起す。

目を閉じたままのよし乃。

よし乃の頬には軽い火傷が来ている。

みらい「よし乃さん、しっかり！」

と、よし乃の体を揺するが、目を閉じた

まま反応がない。

みらい「ほら、目を開けて！」

よし乃「へ目を閉じたまま……」

みらい「駄目駄目。駄目よ、そんなの。まだ

私あなたに謝ってないのよ！このまま死

んだら許さないから。目を開けなさい

よ！」

よし乃「……」

みらい「聞いているの？よし乃さん、お願い

よ……あなたを疑った私が馬鹿だった。

だから目を開けて、何で黙ってるの？」

よし乃「……」

みらい「そうよ。私は独りよがりで傲慢で、

周りを傷つけても何とも思わない最低の間。あなただけにじゃない。芋飼さんや永倉さん、それに多くの人を傷つけて……」

みらい「みんなごめんなさい」

みらい「よし乃に抱きつき鳴咽する

さんには今までもない私だけに、欲しいの。お願いだから私を独りにしないで」

よし乃「うっ……」

みらい「へ泣き止み」よし乃さん？　よし乃

さん？！

顔を顰めるよし乃。

みらい「よし乃さん、絶対に死なせないわ」と、よし乃を背負い、渦巻く炎の中を玄関に向かって歩き出す。

○同・前道路

みらい、よし乃を背負い、炎の中から現れる。

消防士「大丈夫か？！　さあ、早く救急車へ」

救命士数名に支えられながら救急車に乗るみらいとよし乃。
スマホを手にする野次馬から一斉に歓声が沸き起こる。

○×××総合病院・外観

○同・病室

みらいとよし乃、隣同士のベッドで横になっている。

みらいの両手首には包帯が巻かれており、よし乃の右頬には大きなガーゼが貼られている。

よし乃「会長さんが燃え盛る炎の中、勇猛果敢に私を助け出してくれたんですってね。友達を助ける為とはいえ中々出来る行動じゃないって消防の方も」

みらい「ふーん。そっ」
 と、照れくさそうに掛け布団で顔半分を隠す。
 よし乃「でも、一つ間違えれば二人とも命を落としてたかもしれないから、もう二度とするなあって。勇敢なのと無謀なのは全然違うぞって」
 みらい「何、それ？ 結局説教されてる、私？ ムカつく！」
 と、寝返りを打ち、よし乃に背を向ける。
 よし乃「会長さん？」
 みらい「何？」
 よし乃「助けてくれて本当に有難う。言葉では言い尽くせないくらい感謝で一杯です」
 と、深々と頭を下げる。
 みらい「へよし乃を振り返り」よ、よしてよ。気持ち悪い。それより何で火事に？」
 よし乃「それが年甲斐もなくアロマキャンドルを焚いてるうちにウトウトしてきて、気づいたらもう火の海で。どうしようもない馬鹿ね、私って」
 みらい「そう、アロマキャンドル……」
 と、胸を撫でおろす。
 よし乃「私、学校ではしっかり者の優等生で通ってるけど、部屋の中見たでしょ？ 実際は身の回りのことも真面に出来ない駄目な女。その上、男を見る目もさっぱりだし」
 と、皮肉に微笑む。
 よし乃「私、若い頃から自分に自信が持てなくてね。他人に好かれるために必死に自分をとり繕って、そんなだから簡単に人に騙されるのね。とんだお笑い種だわ」
 みらい「お笑い種は私よ。学園のために必死にやっけて来たけど、結局それも自己満足だった。今ではただの嫌われ者。居場所だっともうどこにも」
 と、掛け布団を強く握り締める両手が小刻みに震える。
 よし乃「会長さん……」

みらい「裏掲示板見た？」
 よし乃「いえ」
 と、首を横に振る。
 みらい「連日、私への容赦のない誹謗中傷が
 飛び交ってる」
 よし乃「スマホの裏掲示板をスクロール
 していく。」
 みらい「何これ、酷い……」
 よし乃「ウケるよね？」
 みらい「えっ？」
 みらい「散々人を排除してきた私が今度は排
 除される側だよ」
 と、皮肉に笑う。
 みらい「でも、それも当然ね。あなたや周り
 の大事な人を傷つけ、遠ざけてきたんだか
 ら」
 スマホをスクロールするよし乃の手が止
 まる。
 みらい「もう何もかも終わり。私なんて生き
 てる価値がないのよ」
 よし乃「そんなこと言うもんじゃありません
 ！！」
 みらい「な、何よ？ 急に大きな声出して」
 よし乃「あなたはまだまだ若いじゃない。誰
 から相手にもされない年寄りの私と違って
 いくらだって挽回できます。正直、若くて
 自信に溢れた会長さんが羨ましい」
 みらい「よし乃さん……」
 よし乃「それに本当にあなたの味方になって
 くれる人はもういない？」
 みらい「すっかり嫌われ者だからね」
 よし乃「ならこれは？」
 と、スマホの裏掲示板をみらいに見せる。
 『会長、危険を顧みず炎の中に飛び込ん
 で学園の生徒を救いだしたんだって。す
 ごくない？』
 『聞いた、聞いた。私すっ
 かり見直しちゃった』
 『我が学園の誇
 り』
 『会長さん、カムバック』
 など、よ
 し乃を救い出したみらいを賛辞する一部

のコメントが並ぶ。
 みらい、驚いた顔でよし乃を見る。
 よし乃、みらいに頷き返す。
 みらい、スマホ画面を再び見つめる。
 よし乃「ちよっと待って、これは？」
 『自作自演の印象操作に騙されるな』
 『フェイクよ、フェイク。絶対フェイク』
 『あの小娘は生粋の悪人だぞ、そんなことをするわけ絶対ない』などの批判コメントをよし乃に見せる。
 みらい「ほらね、現実はこのものよ」
 よし乃「全員に好かれようなんて到底無理よ。普通に生きてたって妬み嫉みは買う。会長さんのことを本当に理解してくれる人がいればそれで良いじゃない」
 みらい「そんなきれいな事よ」
 よし乃「最初は僅かでも、会長の頑張り、でまた仲間を増やしていけばいい。そりや、きれいな事ではないかもしれない。でも、それしか方法がない気がするの。それとも、会長さんには少し荷が重いかしら？」
 みらい「そ、そんなこと！」
 よし乃「（みらいを見据え）なら、ね？」
 みらい「分かったわよ、やるわよ。但し一つ条件がある」
 よし乃「条件？」
 みらい「あなたも一緒に嫌。私にはあなたが必要よ。また私が暴走しそうになったら傍にいて止めて頂戴」
 よし乃「会長さん……」
 みらい「も、勿論、今度は極力そうならないように努力はするわよ」
 よし乃「分かりました。微力ながら引き続き会長さんの力にならせていただきます」
 みらい「ホント？！」
 よし乃「ええ」
 みらい「ありがとう」
 よし乃「そうだ、命の恩人に何かお礼をしないかね。さっき売店で会長さんが喜びそう

なのを見つけたの」

みらい「いい、いい。そんなお礼なんて」

よし乃「ジャンボ焼きそばパンですよ」

みらい「えっ」

と、生唾を飲み込む。

よし乃「ウチの購買部、ここの売店にも商品

を卸してるみたいなの」

みらい「あの店主、中々手広いわね。でも、

本当にいいの？」

よし乃「ええ、今日は年金が出たところなの。

奢らせて」

みらい「そう。それじゃあ、ゴチになるっか

な」

と、みらいとよし乃、楽しそうに部屋を
出て行く。
(了)

